
七つの鍵の物語 - 【英雄】 -

上野文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七つの鍵の物語 - 【英雄】 -

【Nコード】

N4405N

【作者名】

上野文

【あらすじ】

独裁者によって支配された小国。

収容所に閉じ込められた幼なじみを救う為、少年は”逃がし屋”と呼ばれる男を訪ねる。

残酷な軍隊を相手に、少年と逃がし屋の奮闘が始まる。

第1話 痩せこけた兵士

七つの鍵の物語 - 『英雄』 -

第1話 痩せこけた兵士

1

およそ、一千年前、旧文明は神焉戦争と呼ばれる大戦争によって滅んだ。

辿りついた者に、あらゆる願いを叶えるとされる世界樹。

彼の地へいたる扉を開く、七つの鍵を巡って諸国は争い、致命的な災厄を呼び込んでしまった。

ミスガルズ大陸。神焉戦争の後、人工の浮遊大陸を除いて、ただひとつ残された地上の大陸。

この大陸もまた、神焉戦争で中央部に隆起した大断崖によって、東西に分断されてしまった。

大陸西部を治めるは、『西部連邦人民共和国』。通称、共和国。

大陸東部を治めるは、『ガートランド聖王国』。通称、王国。

けれど、世界に存在するのは、そんな巨大国家ばかりではない。

大陸南部には、共和国にも王国にも属さぬ小国家がひしめきあい、日々を生きていた。

アレックス・ブラウンの生きるナラール国も、そんな小国家のひとつだった。

ナラール国首都、ヨンハンは荒廃していた。

国を治める大元帥、ユーリ・オールドマンの住む中央部はともかく、郊外の農村地区は、数年前に首都を襲った未曾有の大洪水から未だ復興していない。

少し畑を歩いてみればわかるだろう。

刈り入れた麦は、穂が短く粒が小さく、栄養不足で未発達な茎は中ほどから折れてしまっている。

極度な密植が災いしたのか、畑の土はやせ細り、ひび割れた大地は、種を蒔き、苗を植えても実ることはほとんどなくなった。

洪水をきっかけに起こった飢饉は、農地崩壊とあいまって、瞬く間に全国土へと広がった。

”偉大なる指導者”ユーリ・オールドマンは比較的荒野に強いとされる、ジャガイモや豆類などの作付面積を増やすように命じたが、彼も彼のブレーンたる官僚も、掛け声ばかりが大きくて、具体的な支援政策を何一つ立案できず、施行する事もなかった。

そして、飢饉の被害を受けたのは人間だけではない。

飼料の不足は農家の家畜を次々と餓死させ、あるいは食料へと換えられた。

家畜の死は畑の肥料となるたい肥の生産量を減らし、たい肥の減少が更なる生産量の減少を招く。

まさに、悪夢のような、抜けられない窮乏のスパイラルにナラール国は陥ったのだ。

あるいは、共和国のように広大な領土と莫大な人口を有するか、王国のように外交貿易で培った潤沢な資金があれば、このループから抜け出す事もできたかもしれない。

だが、ナラール国の元帥は致命的な程に内政手腕に劣り、外交においては喧嘩を売るしか能の無い無能者だった。

ナラール国の斜陽は加速する。

ユーリ＝オールドマンは、外交上の後見人にあたる共和国に援助を求め、外貨を得るために阿片やタバコの栽培を進めて、密貿易へと踏み込んだ。

よく知られているように、阿片は貪欲な食物だ。土地の栄養分を根こそぎ吸い取り、死の大地に変えてしまう。

阿片に侵され崩れ行く大地と、麻薬に汚染された国家上層部。

内政においては、ナラール国の窮乏と崩壊がいよいよ進み、外交においては、国家が犯罪を後押しするという宣戦布告ものの愚策に大陸の諸国は激怒した。

それでも元帥は止まらない。

大陸最強の軍事国家である共和国の後ろ盾を使って周辺諸国を恫喝し、国内で反抗するものは片端から憲兵に捕らえさせて収容所に送り、重労働で使い潰した。

彼にとって重要なのは、自らの権力を維持する事であり、国外の風聞などまさに蛙の面に小便をかけるようなものだった。

元帥にとって、国民は死ねば替えのきく都合のいい道具に過ぎず、そして、ナラール国の国民は…。

（何もかも王国が悪いんだ）

アレックスは、ヨンハン郊外にあるスラムの、半ば崩れ落ちた家々の間を歩いていた。

彼の赤い短髪は栄養失調でくすみ、頬はこけて、手足はまるで針金のように細い。

十三歳のときに徴兵されて、およそ5年を軍で過ごした。

毎日の過酷な軍の訓練とは裏腹に、最低限の食事しか得られなかったため、アレックスの身長は目に見えて低く、鍛え上げたはずの肉体も、どこかひよろひよろとして、もやしのように見えたる。

アレックスの着る軍服は、質が最悪で所々ほつれ、ズボンも穴だ

らけただったが、この冬の寒さの中何も着ないよりはマシだ。

ナラールの国民は一部の富裕階級を除いて、ほとんど半裸で暮らしていた。

火を焚く練炭はとうの昔に尽き果て、石炭や油はすべて軍の幹部が掌握している。

ナラール国の危難は大陸の各地に知れ渡り……。

毎年王国や他の国々から、毛布などの防寒具や食料、粉末化したミルクなどの支援物資が届いていたが、これらは軍需物資に変えるために、共和国に売り渡されていた。

必要な…事なのだ。

すべては諸悪の元凶である王国を討つ為に。

豊饒な大地と富をナラール国が得るために。

（僕たちの国が貧しいのも）

ヨンハン郊外のスラム街に、アレックスの目的地はあった。

軍人は、ナラール国では憲兵と共に、最も怖れられる存在だ。

20歳に満たない若造に過ぎぬアレックスが歩くだけで、人々は家の扉を固く閉じて息をひそめる。

（彼女が……ったのも）

凍死した死体の転がる裏道を歩き、入り組んだ路地裏を潜り抜ける。

スラムの奥、朽ち果てた家々の中に隠れ潜むように、その男は住んでいた。

取っ手の壊れたドアを叩いて声をかける。

「こんにちは、今日はいい天気ですね？」

しばらくして、聞いたこともない訛りの、低い声が返ってきた。

「……ええ、読書日和です」

「百科事典はご入用ですか？」

「是非」

ドアが、微かに開けられる。

アレックスは身を滑り込ませるように、家へと入り込んだ。

腐り落ちた床に横たわる、四つ足の折れたテーブル、粉々になった椅子やたん筭の残骸。

中央には、それらをくべて焚いたらしい火の跡が残っていた。

薄暗い部屋の中、頭まで毛布をすっぽりと被り、口に木の枝を咥えた得体の知れない男が立っていた。

「あなたが噂の”逃がし屋”か？」

「”逃がし屋”とは人聞きが悪いが、君が探していたのは、おそらく俺だ」

アレックスは、腰に縄で縛り付けた支給品のナイフを、いつでも抜けるように気を引き締めた。

緊張に震える手で、軍服のポケットから大事に畳んだ紹介状を取り出し、彼に見せる。

これを手に入れるだけで、給料の半年分が消えていた。

そして、この依頼で、すべての貯蓄が消えるだろう。

次に頼む金は無い。

そもそも事が露見した時点でアレックスの命は無い。

国外脱走は重罪で、見つかったものには酷い拷問が課せられる。

二度と逃げられぬよう、手を砕かれたものや足をくだかれたもの、半身不随になるまで弄びながら壊されたものもある。

それでも、彼は探し出した。

囚われた…を救うため。

身元、正体、一切不明。

しかし、めつぽうに腕が立つという外国人の”逃がし屋”を――。

「お願いだ。ナーシャを、テムスンの収容所からナロール国へ逃がしてくれ」

ナロール国と隣国ナロール国の確執と悲劇は数百年前に遡る。

ナロールとナロールは元はひとつの国家であり、一万年の歴史を持つ平和な国家だった。

だがナロールの繁栄を妬んだ邪悪な王国は200年前、突如ナロールに侵攻し、都市の全てを破壊し、女子供問わず全人口の三分の一を強制的に徴兵、本国へと連行したのだ。

100年前、王国と共和国に何度目かの休戦協定が結ばれ、ナロールは独立を果たしたものの、唾棄すべき王国は浮遊大陸アメリカの威を借りて、非常に醜悪な干渉を行った。

共和国の比護の下、ナロール独立を図る初代元帥に対し、南部小国家のいくつかと諮って反乱軍を支援、旧ナロール領の半分を占拠するナロール国を打ち立てた。

かくて兄弟であり、同胞であったはずのナロールとナロールは、肉親で骨肉を相食む悲劇の戦いへと導かれた。

もつとも、近年は両国の交流も盛んで、ナロールからナロールへ、ナロールからナロールへ、使節団やスポーツ選手団が派遣されることもある。

アレックスの幼なじみ、ナーシャは音楽学校の生徒で、応援団としてナロールに派遣され……行方不明になった。

そして、一ヶ月前、アレックスは、政治犯が収容されるテムスンの収容所で、囚人として囚われた彼女と再会した。

”逃がし屋”は相変わらず毛布に包まれたまま、アレックスの話

す王国の悪業とナラール・ナロールの悲劇に耳を傾けて、やがて噛んでいた木の枝をピンと指で弾いた。

「アレックス、ひとつ聞いていいか？」

この世界の文明は、1000年前に一度滅んでいるらしいんだが、旧世界から王家の血を残しているのはガートランド聖王家だけと聞く。

いくらなんでも、ナラール一万年の歴史には無理がないか……？」
胡散臭そうに木の枝をかじる”逃がし屋”の反応に、アレックスは肩を震わせ、顔を真紅に染めて反論した。

「大陸の文明は、ナラールから始まったんだ。

ガートランド王家の伝説なんて嘘っぱちに決まっている。

歴史の無い粗野で野蛮な王国が、ナラールを占領して、ナラールの王様と王妃様を殺して、歴史的な遺産のすべてを焼き払ったんだ」
アレックスは大声で威嚇して怒鳴りつけたも、”逃がし屋”は怯えるそぶりひとつ見せない。

防寒着のつもりなのか、毛布をひきずったまま家の隅へと歩き、そこから見たことも無い、珍妙な素材で出来た白い長方形の物体を取り出した。

驚くべき事に、木の枝を咥えた”逃がし屋”が指でジーと音を立てると、中からドサドサと羊皮紙や植物紙を束ねて綴った本が零れ落ちた。

どうやら魔法道具の一種で、鞆のようなものらしい。

「俺も一応、この国を訪ねる前に、歴史について調べたんだが…。

幸い、当時、ナラールは大陸の注目を浴びていたから、資料も残っていた。

残念だが、このナラールの地は、古来から共和国の属国も同然で、立法も司法も、行政府も、ほとんど機能していなかった。

すべてを共和国に依存していたから、通貨も流用だし、独自性のある建造物、技術は皆無だ。

そもそも王族の追放と王妃殺害はナラールの民が先導してやった

……」

「黙れッ！！」

無知で傲慢な”逃がし屋”のあきれ果てた暴言に、アレックスは心底腹を立てた。

これだから外国人は信用できないのだ。

学校でも軍隊でも、ナラール人と共和国以外は、粗野で野蛮な虫けら以下だと習ったがその通りだ。

文明人の基本である道徳や、栄光あるナラールの歴史を知りもしないで、生意気な口を利く。

なるほど頼みもちこんだのはこちらだが、そもアレックスは軍人だ。民間人として然るべき態度があるのではないか。

これだから未開人はと、アレックスの身体は怒りで燃えるようだった。

「そんなものは王国の捏造だ！

ナラールでは、子供だって知っていることだ。

学校の国定教科書に書いてある。

王国は、ナラール中の建物を焼き払い、民の三分の一を奴隷として本国へ連行したんだ」

「言葉を返すようだが、他国に伝えられた王国のナラール併合は、大陸の歴史上まれに見るほどに平和的なものだっただけだ。

ナラールは共和国に攻められても、ルナーク国に攻められても、逃げるばかりで闘おうとしなかった。

逃げて逃げて踏みしだかれて、自分ではどうにもならないからと、王国に泣きついて外敵から保護してもらったんだらう？

ナラールを併合した王国は、通常の租税のほかに、毎年王国の家予算の一割を投じて、水道・道路、教育機関などの公共設備とインフラを整えている。

今、ナラールで使われている文字も、王国が広めたものじゃないか。

何より、”王国の統治下で、ナラール人の寿命も人口も、王国併合前の2倍に増えている”。

人口の三分の一を強制連行して2倍に増やすなんて、王国はどんな魔法を使ったんだ？」

プツンと、アレックスの中で何かが切れた。

瞳孔が開き、腕と脚が痙攣^{けいれん}し、心臓が爆発しそうになる。

ありったけの罵詈雑言^{ばらざげんご}で、”逃がし屋”たち外国人の後進性と道徳の低さをのしり、ナラールの偉大な歴史を神話を交えて歌い上げ、王国の悪逆さを説明した。

「ともかく！ 王国が全部悪いんだっ！！

何もかも王国のせいなんだ。

それが正しい事なんだ。

わかったか！？」

無能な”逃がし屋”も、ようやく理解してくれたらしい。

自らの無知蒙昧^{むちもつまい}さを恥じているのか、口に咥えた木の枝をぽつきり折って、重い息を吐いている。

これでわからなければ、アレックスは彼を殴りつけるところだった。

「ああ、よくわかったよ。あの陰険根暗女め、大変だったんろうなあ」

”逃がし屋”は、毛布からはみ出した黒い髪をかきみしり、奇妙な事を言った。

「根暗女？ 僕は男だ」

「ああ、こいつは別件だ」

アレックスは、大事に貯めた銀行の預金通帳を”逃がし屋”に差

し出した。

「頼む、これで、ナーシャを救ってくれ」

「悪いが、そいつを受け取る気はない」

アレックスの脳裏で、何かが弾けた。

腰からナイフを引き抜き、有無を言わず”逃がし屋”に切りつける。

「あ、あ、うわあああああああああああつ」

「逆切れで殺人かよ！ 洒落になってねーぞ」

”逃がし屋”は逃げ出そうとでもするかのように、後ろに一步退いた。

逃がしはしない、わずかに残った理性で、アレックスは判断する。彼は正規の訓練を受けた軍人であり、そして、喜ばしいことにナイフの扱いには一定の評価を受けていた。

アレックスのナイフは縦横無尽に毛布を切り裂いて宙に散らし、逃し屋の乱雑に結わえた黒髪と、薄茶色の眼鏡があらわになる。

”逃がし屋”の身長は、アレックスに比べて頭二つ高く、肩幅も大きい。体格では明らかに負けているだろう。

外国製のものなのか、どんな麻や綿にも似ていない…見たことも無い厚い生地で作られた上着を身にまとい、毛布の下に黒光りするバールのようなものを持っていた。

だが、体格差など、殺し合いに何の意味があるかとアレックスは思う。

生き残ったものが勝ちなのだ。

逃げ回るだけしか能のないドブネズミと、名誉あるナラールの軍人。

元帥の威光に逆らう少なからぬ抵抗分子を処分してきたアレックスに、たかが一介の”逃がし屋”風情が勝てるはずもない。

「……っ！」

「そがつ」

アレックスはナイフを振りかざし、床が崩れ、むき出しになった地面を蹴って、”逃がし屋”の懷に斬り込んだ。

一方、”逃がし屋”は一步左に踏み出すや、右手で毛布の残骸をアレックスに投げつけてナイフの突進を阻み、左手首をひねるようにしてバールのようなものを跳ね上げた。

腰下から顎に向かって伸びる鉄棒。しかし、毛布をいなしたアレックスは、首をそらす事で、鉄棒に髪一本切らせて避ける。

リーチ差のある敵と戦う場合、最も重要なのは間合いだ。

ナイフは、鉄棒に比べて確かに短いだろう。

だが、アレックスの方から接近してしまえば、”逃がし屋”の優位点である獲物の長さは、取り回しの悪さに変わり、致命的な隙を生む。

「死ねえっ」

「死ねるかよっ」

踏み込んだアレックスに対し、意外にも”逃がし屋”も踏み込んで、拳を突き出してきた。

無駄なことだ。

アレックスは後ろに跳ねるように距離をとり、ナイフを逆手に構える。

”逃がし屋”の右拳は届かず、突き刺しがいのある無防備な腹をさらしている。

「ぐわっはあああああっ」

アレックスがナイフを挟りこもうとした瞬間、視界の左半分が赤く染まった。

届かないと判断した”逃がし屋”の右拳、否、そこから伸びていた中指が、アレックスの左目蓋を切っていたのだ。

「悪いな。それでも、このデタラメな世界で修羅場をくぐってきたんだ。」

お前のナイフは鋭いが、それだけだッ」

アレックスには、何が起こったのかさえわからなかった。

”逃がし屋”が半身の構えから放った、大上段からの回し蹴り。

熱く重い衝撃を、左側頭部にまともに受けて、そのまま彼は昏倒した。

アレックス・ブラウンが、ナーシャ・キスカと初めて出会ったのは、幼年学校に入る前の事だった。

軍人だった父の同窓生が、娘を連れて家に挨拶にきたのだ。

二本に分けた山吹色の髪、つんと澄ました横顔、人形のようなドレスで正装して、いかにもよそよしく振舞いながら、青い目を見開いて興味津々と見回っていた姿が愛らしかった。

アレックスは、幸福など感じたことはない。

だが、少なくとも、あの頃は不幸ではなかった。

父、イワン・ウリヤノフは数学教師として大学で教鞭をとり、母メアリ・ブラウンも講師として外国語を教えていた。

父は上流階級の出身であり、母はナールでは数少ない外国語の教師として重宝されていた。

生まれた国の異なる、二人の結婚が幸せなものだったのか、幼いアレックスには知る由もない。

けれど、両親が生きていた頃の生活は平穏で、穏やかだった気がする。

アレックスが8歳のとき、父が元帥暗殺計画の首謀犯の一人として拘束され、処刑された。

父の死を待たずして、母も自殺、アレックスは父の弟である叔父の家に引き取られた。

それからの生活は、地獄だった。

ナラールの社会差別は凄まじい。

王国に住むナラール人の中には、永住特権の認可や、幾度でも変更可能な偽名・通名の社会権確立、その通名を利用した口座の無限増殖による脱・節税、公務員への就職の認可と特別優先枠の確保、私設学校や私設会館への税金免除…など、他の外国人以上の待遇を、むしろ王国人にもありえない冗談のような特別優遇措置を保障され、その特権を利用して巨大な財産を築いている…という噂もあるが、アレックスにはまるで御伽噺のように聞こえる。

元帥の決めた100以上の階級に分類され、上級にふるい分けられた者達は、下級のもを人間扱いしなかった。

命令して、従おうと従うまいと、殴る蹴るの暴行は当たり前。

なかでもアレックスのような混血児は、階級以上に差別され、文字通り”家畜以下”の扱いを受けた。

叔父の家に引き取られてからは、有良血族を意味するウリヤノフ姓を名乗る事は許されず、日々叔父の家族や縁戚から”穢れた子”として日々暴行を受けた。

辛うじて通うことが許された幼年学校では更に悲惨だった。

アレックスの教科書やノートは支給されず、私物は迫いはぎ同然に略奪された。

生徒も教員も雑務をすべて押し付けて、少しでも処理が遅れると容赦なく体罰や制裁を課した。

食料の配給は誰よりも制限され、たとえ支給されても叔父の家族や学友に奪われて、生ゴミにすらありつかなかったこともある。

それでも、アレックスは頑張った。生きるためには、そうするしかなかった。

誰もが、自分よりも下のものに当たるというのなら、最下級のも

のはどうすればいい？

黙って黙り殺されるか、あるいは生きるために強くなるかだ。テストで明らかな正解を、誤答として撥ねられてもめげなかった。長距離走大会で好成績を取るも評価は最低で、以後は大会が近づくたびに集団私刑を受けても諦めなかった。

だが、殴られるたび、罵られるたび、何かが壊れてゆく気がした。

その日も、アレックスは級友たちに頭からゴミ箱をかぶせられ、廊下中を引きずり回され、背や腹を蹴り倒され、校舎裏に打ち捨てられた。

いつそ、認めてしまえばいい。

傷ついたアレックスの心と身体が甘く囁く。

自分は家畜以下の存在に過ぎないと。

穢れた二重雑種<ダブル>として、純血の上位家族に仕える為に生まれて来たのだと。

（ふざけるな……）

生まれが違うのは、どうしようもない。

金持ちには金持ちの、貧乏人には貧乏人の生き方があるだろう。

善功を積んだ者には善人の、悪行を犯した者には悪人の、評価が与えられてしかるべきだろう。

だが、何の努力もせず、ただ元帥に振り分けられた階級だけを根拠に、自分よりも立場の弱いものを見下し、蹂躪し、使役する。

”混血”だというだけで、何の犯罪も何の悪事も犯していない者を、ここまで虐げる事が許されていいと云うのか？

（俺は負けない、生きて、生き延びて）

生きて、どうすればいいのだろう？

よろよると歩きながら、アレックスは自嘲する。

何もない。

希望も、未来も。

混血である限り、ナラールで生きる事は隷属しかない。

母のように外国後の教師や、あるいは軍の諜報員として生きようとしても、父の罪がそれを許さない。

絶望の深遠だけが、アレックスを覗き込んでいる。

（俺は…）

ふと意識が遠くなった。

自分が倒れる音を、どこか遠くで聞いた気がした。

――

意識が戻ったとき。

アレックスはなぜか裏庭の木陰にいた。

「ふん、やっと目が覚めた？」

信じられなかった。

目の前にあったのは、あの懐かしいお人形のような服を着た女の子。

ナーシャ・キスカの成長した姿だった。

「ナーシャ、どうして？」

「何だ。覚えていたの？ 感心ね。」

重いよ。いいかげん、どいてくれない？」

アレックスは言われて初めて、自分がナーシャに膝枕されている事に気が付き動転した。

「ど、ど、どどど、どうして!？」

転がるように起き上がったアレックスに、ナーシャは応えず、埃を払って立ち上がると、手に持った小さな鞆から、可愛いお弁当を取り出して、無理やり手に押し付けた。

「食べなさい。お腹空いてるでしょう？」

彼女の発言の意味が分からず、アレックスはしばし呆然として、慌てて押し返した。

「駄目だ。受け取れないっ」

「口答えをしない!」

「はいっ」

下級血族は上流血族に従うが定めだ。

アレックスは、愕然としたまま、弁当箱を受け取ってしまった。

「それでいいの」

ナーシャは用が済んだとばかりに歩き出し、裏庭の出口へと向かってゆく。

アレックスは、わけがわからないまま、彼女を見送って。

彼女が、唐突に、振り返った。

「勘違いしないでよ。

今日は食欲がなかったの。

たまたま余ったからあげただけ。それだけなんだからね!」

それだけを言い放ち、今度こそ用はないとばかりに、ナーシャは校舎へと戻ってしまう。

「どうして…？」

わからない。

なにもわからないまま、アレックスは弁当を口にした。
何の変哲もないサンドイッチ。

けれど、アレックスにとっては…。

数ヶ月ぶりの、否、数年ぶりのまともな食事だった。

味を感じて、舌が痺れた。

まるで爆発するように、何かが広がった。

ぽつりと、瞳から熱い何かが零れ落ちた。

それが涙とわからぬままに、

アレックスは、ナーシャの弁当箱を抱きしめて、食糧を貪った。

第2話 金に汚い逃がし屋

第二話 金に汚い逃がし屋

2

目覚めの合図は、鈍い痛み。

ひんやりとした感触が、アレックスを懐かしい夢から呼び覚ます

……。

「いい加減起きろ、タコナス」

「うわあっ」

冷たい何かをグリグリと押し付けられて、寒さと痛みでアレックスは飛び起きた。

「な、何をする!？」

「治療だ。治療。先に言って置くが、最初に斬りかかって来たのはお前だ。」

だから、こいつは正当防衛だ。

お前がどんな風にオビレつけようが知ったこっちゃないが、謝罪はしないし、賠償も受け付けない。

そして、俺はここから去る。じゃ、後はヨロシク!」

そう、立て板に水を流すように言い立てて、どこの国のものとも知れぬ、奇妙な上着を羽織った”逃がし屋は、鞆を手に出口へ向かって身を翻した。

（治療だつて……？）

そつと手で顔に触れてみると、確かに指で切られた左瞼には包帯が巻かれ、蹴り飛ばされたこめかみには、皮袋で作られた氷嚢が置かれていた。

アレックスは、わずかな時間、去り行く逃がし屋の背を呆然と見つめ……、我に返つて、胸ポケットに入った通帳と、腰に縛り付けたナイフの鞘をまさぐった。

「待て。待つんだ！」

「待てと言われて、待つ奴はいない！」

「逃しはしない！」

アレックスは頭上の氷嚢を掴み、逃がし屋の頭越しに戸口へと投げつけた。

紐で縛られた皮袋の口が開いて、氷と水が、濡れた音を立てて、サツと広がり……。

足をとられることを恐れたのだろう”逃がし屋”が、一瞬躊躇した隙について、アレックスはナイフを手に背中から踊りかかった。

「まだ、やる気かよ？」

”逃がし屋”の反応は、早かった。

振り向きざまに、鞆を盾にアレックスのナイフを受け止めて、むき出しの地面へ投げ捨てる。

同時に、ボールのようなものを引き出して、アレックスの振り下ろす斬撃を、下手で受け止めた。

白銀のナイフと、黒々とした鉄槌くわづが噛みあい、火花を散らす。

「なぜだ？ なぜ僕を手当てした？」

「ハア？」

逃がし屋は、なぜ怒鳴られるのかわからないとばかりに首をかし
げ、

その様が尚更アレックスをいらだたせる。

「目の前で通帳を持った二十雑種^{ダブル}が倒れているんだぞ？

殺して身包みはいで行くのが普通じゃないか？」

「阿呆言うな。なんで俺がわざわざトドメささなきゃならんだ。
だいたい、そんなはした金もらっても仕方ないだろ？」

はした金、その逃がし屋の言葉に、アレックスの血が燃え盛る。

「はした金、はした金と言ったか！？ この金は僕の五年分の……」

「軍人のお前はくいっぱぐれないだろうがな、今の闇市のパン一個
の値段がどうなってるか知ってるのか？」

「闇市は違法な取引だ！

そんなものがないくても、食料は政府がちゃんと配給している！」

アレックスは、床が腐り落ち、むき出しになった地面を蹴って、
土を蹴り上げた。

目潰しを兼ねたかく乱だ。

だが、色眼鏡をかけた逃がし屋は、ひるむことなく鉄棒を振るい、
アレックスは、辛うじてナイフの柄で受け止める。

「ユーリ・オールドマンの取り巻きと、軍人、警察にだけに、だろ
！？」

殴打の衝撃が、アレックスの手のひらを震わせ、痛みで感覚が消
失した。

唯一の武器であり、盾でもあるナイフが使えなくなった瞬間、逃
がし屋がえぐりこむような左の拳を放ってきた。

思わず飛びのいてかわせたのは、先ほどKOされた、苦い経験が

あつたからに他ならない。

「そ、それは食料が足りないからだ。怠け者は配給を止められて当然だろう！」

「麦を作つてるのはお百姓さんだろ？ 軍人でも警察でもない」

「だが、彼らを守っているのは我々ナラール軍人だ」

「寄生している、間違いだらうが？ いい加減にどけ！」

逃がし屋の右膝が曲がる。

鉄棒と拳、上半身に意識を集中していたのが災いした。

あたかも鯨を撃つ銚のような強烈な前蹴りが、アレックスの薄い胸板に突き刺さり、身体が宙に浮いた。

(こいつ、なんで徒手空拳で……)

アレックスには、鉄棒を盾として用い、拳と足を矛に使う、逃がし屋の戦いが理解できない。

そもそも、現在のミズガルズ大陸には、「素手格闘術」という概念が存在しなかった。

たとえば、北派、南派の中国拳法、沖縄の唐手、会津若松の合気術、南米の舞踏格闘術力ポエラ。

これらの拳法は、「武器の携帯」の認められない社会で身を守るために、苦肉の策として編み出されたものだ。

武器の存在が身近であった欧州、開拓地から発展した北米等で、「素手の格闘」が、脚光を浴びるには、近代を待たねばなかった。千年前の遺跡から、今なお人に仇為す怪物が彷徨い出てくる世界では、剣や槍、弓等の射撃手段を扱う戦闘術こそ必要とされても、体系化された無手の攻撃手段が存在するいわれはない。

ゆえにこそ、武器を手にしながら「無手で戦う」逃がし屋は、アレックスにとって未知であり、脅威だった。

「どかない。僕にとって、誰より大切なひとなんだ。この命に代えても、救ってもらおう！」

もはや、後先も考えず、アレックスはナイフを腰ダメに構えて突進した。

後から思い返して見れば、その突進は、あまりに感情任せで、無謀で致命的だった。

殺してしまえば、救うも救わぬも無く、一方の逃がし屋は冷静に、冷酷に、誘導したのだから。

アレックスを、氷と水でぬかるんだ、その場所へ。

「え？」

すべったと思ったとき、すでにアレックスの身体は宙に浮いていた。

受身もとれず、顎から強かに地面へと叩きつけられる。

痛みで、視界に白いノイズが走った。

（ダメだ、今度こそ、殺される）

手当てを受けながら、背後から斬りかかったのだ。

自分ならば、情け容赦なく四肢を砕き、頭を串刺しにするだろう。

鉄棒を振りかぶる逃がし屋を予想して、アレックスは泥にまみれた顔をあげた。

だが。

「いいぜ、話だけは聞いてやる」

そう言って、逃がし屋は鞆を拾うと、壊れた家具の残骸に腰を降

ろした。

アレックスとナーシャが再会してから、しばらくの月日が流れた頃。

「なぜ君は僕を庇うんだ？」

ある春の日に、校舎の裏庭で、アレックスはそう、ナーシャにたずねた。

「僕のようなダブルに話しかけなくても、もっと君に相応しい友人がいるだろう？」

問いに込められた、アレックスの恐怖と逡巡と、絶望を吹き飛ばすように、ナーシャは、からからと笑った。

「そうね、貴方が変わり者だったからかしら？」

「酷いな。僕はどうしたって純血のナラール人にはなれない。だから、努力して……」

努力して、何になるのだろう。

アレックスは、言葉に詰まった。

青空の下に立つ、ナーシャが酷くまぶしい。

彼女に比べれば、自分は、木陰の穴に潜む蟲も同じだ。懸命に生きようとしても、忌み嫌われ、排斥されるだけ。

「私があなたを気に入ってるのは、そういうところよ。」
「……よく、わからない。」

ナーシャが、瞳を細めた。

二本にわけた黄金色の髪が、風に吹かれて舞う。
薄い口唇が、風のように問いを紡ぐ。

「諦めようとは、思わなかった？」

それは、何度も自問した疑問。

どれほど頑張ろうとも、アレックスは認められない。

蟲はただ、踏み潰されるために、生きている。

それでも、たとえ地の中を這いずっても。

「何度も思った。僕は、僕は。」

生きようと思う理由ができたから。

「ただ、天邪鬼なだけだよ。きつと。」

アレックスは、オモイを秘める。

それは、言えない言葉。言ってはならない気持ちだから。

「似てるわね。私たち。」

ナーシャは、裏庭の地面を蹴って、石のうえにふわりと立った。

春の風が、彼女の上等な服を撫でて、空へと昇る。

「どんなにちやほやされても、私はていのいい玩具なの。」

取り巻きがナーシャに声をかけるのは、元帥の決めた上の階級にいるからだ。

友誼を結べば、美味しい目に合える。

そんな打算に満ちた、偽りの、空虚な交わり。

「この国は、女にとって生きにくいわ」

ナラールでは、妻は家財道具と同じだ。

見せびらかすもの、備え付けるもの、人格など必要とされない。
女は殴って言う事を聞かせるもの、それが正しいと教育される。

「母様も、叔母様も、不幸だった。」

父や叔父にとっては、一緒に歩くパートナーでも、支えあう伴侶でもない。

激情をぶつけるだけの、あるいは都合よく利用するための道具。ふざけないで、私は、道具になるために生まれたわけじゃない。」

伝統？ 慣習？ 道徳？

女は男にひれ伏すもの。あるいは、男は女にひれ伏すもの。

心を蔑ろに、ただ都合よく作られた価値観が、ナーシャには鬱陶しい。

その未来が定められているがゆえに。

「私、教師になりたいの」

アレックスは知っていた。彼女の夢が叶わぬ事を。

春の世の幻のように、はかなく消える幻想に過ぎないことを。それでも、言った。

頑張れ、と。きっと、なれる。なってほしいと。

「あなたは、どうするの？」

「ここを卒業したら徴兵される。」

もし、生き続けることが出来たなら、軍人になろうと思う。」

軍人になれば、たとえダブルであつたとしても、ある程度のステイタスが保障される。

それは、アレックスの身を護る鎧となるはずだ。

「この国を守るために？」

「……君を、守るために」

最後の言葉は、花散らす春一番の大風が、飲み込んでいった。

「どうして気が変わったんだ？」

「あんな、助けて欲しいって依頼に来て、いきなり他国への恨み言をえんえんと綴るってどうよ？」

逃がし屋は、切り裂かれた毛布の残骸を集めてマットにし、壊れた家具の上にドンと腰をおろす。

アレックスは、すぐにでも動けるよう、立ったままだ。

「おかしいか？」

「おかしいだろ。」

たとえば親善大使としてやってきて、延々別の国の悪口ばかり言うアイドルとか、首脳会談に来たのに、会談の間中、別の国への罵詈雑言しか言わない大統領とか、どう思う？

ホスト国の首相も大臣も、ドン引きだぜ？」

親善の意味を履き違えているか、余程の常識しらずかのどちらかだろう。

そう例えられてみると、助けを請いに来て、肝心の依頼内容よりも王国への誹謗を優先させる行為も、問題があるような気がした。とはいえ。

「そんなアイドルや、大統領なんて、いないだろう……」

「いや、いたりするんだが。」

事情はわかったが、この予算で国外脱出は論外だ。

警備の共和国兵にかがせる鼻薬一回分にもなりやしない。」

「じゃあ不本意だけど、南部諸国連合を頼るのはどうだろう？
勤勉な共和国兵と違って、連中は欲深いだけの腰抜けと聞いている。」

出し抜くのだって容易いはずだ。」

「……………」

逃がし屋は、こめかみを押さえて、穴の開いた鞆からスクラップブックを取り出した。

「これは、ナロールの新聞か？

どうやって持ち込んだ……浮遊大陸アメリカの主導により、南部諸国家がナロールとのすべての銀行取引を停止！？」

そんな馬鹿な！？」

「正確には、ナロールが資金洗浄に使っていた、モール銀行との商取引を一齐に停止した、だ。」

共和国を除けば、ナロールの外貨獲得の大部分がこの銀行経由だ。」

ナロールは遠からず日干しになるし、大陸でナロール通貨が使えないのもこの国だけになる。」

アレックスは、ガラガラと世界が崩れる音を聞いた。

なるほど、逃がし屋が依頼を受けないわけだ。

大陸水準で考えれば、ナロール通貨は紙切れに等しい。

血管が、唐辛子でも煮詰めたように熱くなる。

「なんて卑劣な裏切りを……ナロールにそのような真似をして、共和国が黙っているものか！」

「卑劣も何も、麻薬は売る、偽タバコは作る、民間人は拉致する……、

……

アーティファクト

フォビドゥンスベル

古代殺戮兵器や禁呪の軍事研究を公言する。

さすがに通貨偽造は、材料の金と銀がないからやってないようだが、ここまでやったら資金洗浄を警戒されて当然だ。

マネーロンダリング
子供を奪われた家族の嘆きが、友を麻薬に殺された者の怒りがわかるか？

ナラールの政策そのものが、周辺諸国への信義と道義への裏切りだろうが」

「……麻薬密造はナラールのせいだけじゃない。共和国がつ」

「共和国も、すでにユーリ・オールドマンを見切っているぞ？

数ヶ月前に共和国を訪ねただろ？ あの時梯子を外された。

金融封鎖をなんとかしてくれて泣きついたらしいんだが、銀行凍結の件に関しての助力は一切出来ぬとき。

共和国政府、パラディース教団の発表はこうだ。自分のケツは、自分で拭け。」

アレックスはまぶたを押さえた。

何度も深呼吸して、激情を整える。

「ナロールだ。ナロールはきっと同胞を見捨てない。」

「……幻想を碎いて悪いが、ナロールはナラールを同胞と思っちゃいないぞ？

連中はいつも言っている。

王国はナロールとナラールを恐れている。

なぜなら、もしも統一がなれば、”ナロールの高い技術力”と、

”ナラールの安い労働力”を駆使して、大陸一の工業立国となるだろうから。だとさ。

仮にも同胞を安賃金で酷使用する気満々じゃねーか。おめでたい。ナロールにとって、ナラールは対等でもなんでもないんだよ。」

アレックスだって、そんなことは、知っていた。

ナラールの中でさえ、すさまじい差別があるのだ。

ましてや、ナロールと合併すれば、どれほどの……。

「だ、だが、もしもナロールが崩壊したら、統一どころじゃなくなる。」

ナロールだって無事では済まないだろう?」

「おいおい、休戦状態とはいえ、敵国だろうに。」

まあ証拠は何もないが、親ナロール派と名高い現在のナロール大統領の命令で、中央銀行が為替取引を利用して、ナロールのブラックマネーの洗濯に協力しているって噂が流れてる。

噂の真偽は不明だが、チャートが露骨にWの字を描く奇妙な取引が続いていたのは確かだよ。

で、それを南部諸国家や妖精大陸のヘッジファンド（投資家集団）に嗅ぎ付けられて、まるで秃鷹に啄ばまれるように資金を奪われてるって話だよ。」

アレックスは信じられない。

ナロールにとって、ナロールは敵だ。

だが、敵であったとしても、強大な敵として認めていたのだ。これでは、あまりにも不甲斐ない。

「ナロールは、大陸でも随一の経済振興を成し遂げた強国だろう！ たかが投資機関に手玉に取られるはずが……」

「王国から何億何兆もの無償援助を受け続ければ、赤子だらけの国でも成功するさ。」

ナロールは、独力で自分の国と経済を作ろうとしなかった。

寄生の歪みが表面化しただけのことだろう?」

逃がし屋はがさこそと鞆を開けて、スクラップブックを整理し始める。

「ナロールって国は、経済収益の7割を輸出に頼る貿易立国だ。為替価値が高まれば高まるほど、輸出産業は不利になる。」

つまり、仕手戦を挑まれば、為替価値を上げないよう枷を嵌めて勝負する事になる」

「為替価値が上がるといふ事は、国の経済が強くなるということだろう？ 何が悪いんだ？」

「実力が伴っていないってことだ。」

たとえば王国のように、経済収益の8割を国内で上げる内需国家なら、相当の無茶な圧力を受けない限り、多少の為替高には耐えられるだろう。

輸入資材や工場を動かす燃料が安くなって、喜ぶ経営者もいるかもな。

だが、ナロールの技術水準は、大陸で先進国と呼ばれる国々の中で著しく低いんだ。

王国製品のデザインをパク……模倣して、主要部品や必要機材を王国から輸入して組み立てて、ナロールの異常な為替の安さを利用して収益を上げていたんだから。

言い方は悪いがストロー貿易だな。そんな国が、仕手戦で為替価値を吊り上げられればどうなると思う？」

アレックスはすでに半分以上、逃がし屋の話についていけなかった。

ナラールでは、文字の読み書きができるだけで博識なのだ。

ナラール国内の企業はすべて元帥の所有物であり、株だの為替だの言われても、わけがわからない。

「お、これだ。これ。」

この通り、あっちの新聞発表によれば、為替高が進んだために、先月の貿易収益は昨年度に比べて95%減少。

『95%に減少』じゃない。『前年度の5%に減った』んだ。

仕方がないから中央銀行は身銭を切っても、ナロール通貨を下げようとし、そのカネをヘッジファンドが美味しくいただくというわけだ」

「……ナロールは滅ぶのか？」

「まさか？ ヘッジファンドは銭にならないことはしない。」

だが、ナロール通貨が高騰を続ければ、ナロール企業の株価は暴落する。

で、安く買い叩かれて、経済植民地化が進む。放っておけば、こうなるだろ？」

「回避する方法は？」

「……少なくとも国内法と国際法の区別もつかない現在の大統領じや無理だ。」

”無能が主導する限り”、たとえ王国の経済規模だって、同じやり方で禿たかどもに好き放題やられるさ。

次のナロール大統領に、優勢らしい反ナロールの野党候補がとって代わるか、あるいは親ナロールの現大統領が暗殺でもされるか。根本的には 王国に寄生するのをやめて、構造改革を進めるしかないだろうが。

もっとも、それができるなら、ナロールとナロールの戦時もとつくに終わってるんじゃないか？

さて、そろそろ聞かせてもらおうか。

アレックス、お前は どうしたい？

予算内でなら協力しよう。俺も、商売をやってるんでね」

逃がし屋が、褐色の色眼鏡の下から、鋭い視線を向ける。
ドクン、と、アレックスの心臓が強くはねた。

悩む必要も、迷う事もない。

必要なのは決断のみ。

「

そして、アレックスは、答えを告げた。

第3話 赤ら顔の反乱分子

第3話 赤ら顔の反乱分子

3

「僕はナーシャを救いたい。その答えに変わりはない」
「何を犠牲にしても？」

逃がし屋の問いに、アレックスは薄く笑った。

「失うものなんて、何もない。」

ナラール辺境にあるテムスン収容所は、思想犯の収監所として用いられている。

収容所は、アーティファクト（古代魔道兵器）のメンテナンスに用いられるレアメタルの鉱山と繋がっており、男の囚人は発掘作業に、女の囚人は研磨に駆り立てられる。

過酷な労働環境から戻る囚人達を迎えるのは、歩く隙間もないし詰めの監房。

人と人が折り重なるように敷き詰められ、彼らの汗や、尿、糞便の入り混じった異臭は廊下にまで漂って、近づくと頭がおかしくなりそうになる。

過酷な労働と生活環境で、囚人達は生きる気力や体力を奪われて、まるで傀儡のように働くだけの……人形となっていた。

かつて、所長であるドミトリー・カウフマンが、戯れに女性の囚

人達の服を剥ぎ、男子房へと追い込んだことがあった。

しかし、疲労の極致にあった囚人達は、動くこともままならず、看守たちの非道を見守るだけだった。

そんな異臭を嫌い、看守と警備兵の詰める区画は、ありったけの香水が撒かれ、異臭を誤魔化していた。

薄い部屋の壁からは、多くの女と、僅かな男の悲鳴が漏れ聞こえてくる。

最悪だ。と、アレックスは胃の中に重いものを飲み込んだ。

これでは、あの忌々しい”逃がし屋”の言葉を否定できない。

ナラールの軍人は、ナラールを護っているのではなく、ナラールに寄生しているだけ。

ろくな警戒も整えず、ただ猿のように暴行に熱中する看守や警備兵など、有事においてなんの役に立つものか。

（かつての戦争で、共和国の援軍を借りてナラールに攻め入ったとき、勇猛なわが軍を前に、臆病なナラール軍は一戦もせず、首都を放棄したと聞いているけど）

ナラール屈指の名将にして、現在は新王国派のレッテルを貼られて追放された……、ミハイル・ジューコフ將軍の率いる第一師団は、ナラールの攻勢に泡を食った浮遊大陸アメリカが派遣した膨大な連合軍の力を借りて、どうにかこうにか首都を奪回したという。

だが、果たして次に戦争になったとき、果たして一戦もせずに首都を放棄するのは、果たしてどちらになるだろう。

あの逃がし屋の言い分を信じたわけではないが、共和国がユーリ・オールドマンの現政権を見捨てているとするならば、将来的には軍事侵攻すらあり得るかもしれない。

大陸最大の人口と、最強の軍備を誇る軍事国家が相手となれば、ナラール如き小国では一日ももたずに崩壊しよう。

むしろ、率先して共和国軍に寝返り、ユーリ・オールドマンの首

を狙う裏切り者が現れるかもしれない。

「何だ。ダブル、貴様も遊びに来たのか？」

「見回りです……」

廊下をうろつくと彷徨っていると、アレックスの上官である、警備隊長ピョートル・コルチャークが熊のような巨大な体躯を震わせながら歩いてきた。

「ふん。うまいことを言うなあ。貴様が遊んだ相手は、このオレに報告するんだ。穢れたダブルと義兄弟になるなど、ゴメンだからなあ」

「必ず……。隊長はどちらに？」

「フン。中央軍士官の令嬢を泣かせる機会など、早々無いからな。今日もいい声で鳴いてもらおう」

ピョートルはガハハと下品に笑うと、上機嫌で、士官室を改装した拷問部屋へと入っていた。

（ピョートル・コルチャーク。貴様は、必ず、殺す）

アレックスが後ろ手で掴んだ腰のナイフが、ギリリと……鈍い光を放った。

「テムスン収容所の正確な見取り図と警備兵の勤務時間表を一週間以内に用意してくれ。そのナースやって子が正気である内に助け出す」

「わかった。だけど、いいのか？ お金はこれが全財産だ」

逃がし屋曰く、はした金しか入っていない通帳を、アレックスはぴらぴらと見せた。

「わかつている。だから、今回のヤマは掛け持ちだ。ちょうどテムスの収容所に用がある連中を知ってる。足りない分は、そいつらからむしりとる」

「守銭奴……」

「金がなきゃ、生きていけないんだよ！」

逃がし屋とアレックスの間で、そういったやり取りがあつたのが三日前のこと。

首尾よく見取り図と勤務表を書き上げたアレックスは、打ち合わせのために、指定されたスラムの一軒屋を訪れた。

逃がし屋は、治安局の捜査を怖れてか、毎日のようにねぐらを変えているらしい。

そんな彼は、誰も居ない家の中で奇妙な踊りの真っ最中だった。

「なあ、あんた、その奇妙な踊りは何なんだ？」

「踊りじゃない。型だ、型！」

客が来たというのに、茶を出すでもなく、逃がし屋は足と手を動かし続ける。

よくよく見れば、窓の外からでは、意味不明な踊りにしか見えなかった逃がし屋のパフォーマンスは、連続した格闘の動きであることが理解できた。

「わからない。あんたは、どうして素手なんかで戦う？ ああ鉄棒で戦った方が強いじゃないか？」

「最後に頼れるのは、自分の力だけだからだ。アレは、借り物の力。俺のものじゃない」

逃がし屋の言葉は、アレックスには意味不明だ。

たとえば、アレックスはナイフが得意だし、石弓もそこそこ使える。

そして、武器は武器でしかなく、使い手は自分だという自負がある。

「アレックス。俺にとってはお前の方がわけわからんよ。たとえ助け出せても、金も職も失うだけだ。たかが女一人のために、どうしてそうむきになる？」

「おかしいか？」

「おかしいね。女と宗教は麻薬だぜ。手をだせば、破滅するだけだ」
褐色の色眼鏡で隠した逃がし屋の視線が、なぜかアレックスには気になった。

「ひよつとして女嫌い、とか？」

「まあ、な。………おい、そこ！　なんで距離を取る！？」

つい、カマキリみたいな雰囲気の所長ドミトリー・カウフマンを連想したから、というのは内緒だ。

彼は極度の女嫌いで、部屋に連れ込むのは、いつも若い男の囚人に限られていた。

「い、いや、そういう趣味もあると思うよ。僕は、身体で払うのはできれば遠慮したいけど」

「俺は男色家じゃない！」

「ち、違うのか」

「違う！　……昔からあるだろう。色仕掛けてヤツが。」

にこやかな顔で媚売って、股開いて反政府運動や宗教に誘いこむ。身体張って組織に貢献するといえば、聞こえはいいが、ああいうやり方は反吐が出る」

逃がし屋の言う台詞か？　とアレックスは思ったが、そこは指摘しないでおいた。

むしろ気になったのは、逃がし屋の態度だった。

「ひよつとして、以前ひつかかったとか？」

「俺じゃない。が、ダチが絡め取られた。」

もう、いかにも宗教ハマってますって顔した陰気な女で、おまけにそいつの親は宗教団体の有名な活動家だ。

関わるなって忠告したのに、あのお人よしの馬鹿は「大丈夫、大丈夫」と言っただけで聞きやしない。

しょうがないから、警告するつもりで呼び出したら、あの根暗女、ちよつと胸元を掴んだだけで問答無用に投げ飛ばしてくれやがった。若い女を呼び出して、警告のつもりで胸元を掴んだ……。

どう客観的に見ても、暴行する気満々だ。抵抗されないわけがない。

「あれ？ ひょっとして、その女の人って、あんたより強いのか？」
「……」

洪顔で頷く逃がし屋の顔がおかしくて、アレックスはふき出してしまった。

「笑うなよつ。しょうがないだろう。」

俺のはなんちゃって空手なのに、あの陰険オトコナ、剣道と合気道を真面目に修めてるんだ。

あいつの投げは凶器だぞ？」

身振り手振りで真剣に論じる逃がし屋がおかしくて、アレックスは笑いが止まらない。

背を震わせながら、何度も深い息を吸い込む。

「あんた、さ。本当はそのひとのこと、嫌いじゃないんじゃないか？」
「？」

「ハア？ ふざけんな」

苦虫を噛み潰すように否定する逃がし屋だったが、アレックスはなんとなくわかった気がした。

彼女の事を話す逃がし屋の、色眼鏡の向こう側に映る彼のまなじりは、とんがって見せた口元は、ゆるんでいたのだ。

（守銭奴の嫌なヤツだけど、こいつにもあるんだ。護りたいものが）

アレックスが軍に入った理由。

ダブルと蔑まれながら、今まで鍛え続けた理由。

何もかもを望んだわけじゃない。

ただ生き延びる力が、ただひとりを守れる力が欲しかった。

「アカーシ！」

不意にドカンと、大きな音を立てて、入り口のドアが蹴り破られた。

酒瓶をもった、赤ら顔の大柄な男が走ってくる。

アレックスが慌ててナイフを引き抜くも、彼は演舞をやめてぽかんと口をあけたままの逃がし屋に突進し、強引に抱きしめた。

「久しぶりだね、アカーシ。また会えて嬉しいよ。元気だったかい？」

「痛い。痛いって。離せ、マートフ。酒臭え。だいたい俺はアカシじゃなくて、アカエダだ。」

「カンジの発音、わかりにくいネっ！　いいじゃないか、キミと

ボクの仲なんだから」

「どんな仲だ〜！」

もがく逃がし屋を見て、アレックスはああ、と感嘆した。

こいつは、やっぱり本物だった。

「僕は邪魔のようだから、この辺で。しばらく席を外すから、どうかしつぽりと友情を暖めてください」

「助けようとは思わんのか！」

「はは。そんな義理あるわけないだろー」

「うお、納得。じゃなくて、話を聞け。この酔っ払いのおっさんが」

「アカーシの愛人ネ」

赤ら顔の酔っ払いは、濃い茶色のひげの下で白い歯を光らせる。
いい笑顔だ、とアレックスは思う。

愛の時間を邪魔してはいけない。早々に退散するでしょう。

「違う！アレックス。聞くんだ。」

マートフは今回のヤマの協力者だ。うぶ、よ、酔いが回る」

「そんな戯言を、信じろって言うの？」

「フーム。信じられないかもしれないが、本当だよ」

「愛人？」

「そう」

「いい加減にしろ！」

アカーシだかアカエダだかわからない逃し屋は、長い髪を振り乱して暴れ、肘でマートフと呼ばれた酔っ払いのみずおちを軽く突き、どうにか抱擁から逃れでた。

最後に頼りにできるのは自分の力だけ。とは、こういうことか。

「紹介する。この酒癖の悪い抱きつき魔のおっさんは、エリ・オシポヴィチ・マートフ」

「メンシエヴィキの代表を務めているんだ。歓迎するヨ、アレックス。我等が新しき同志」

こんなヤツらに全財産を投じて救出を任せていいのか？

アレックスは本気で頭を抱える事になった。

マートフのおっさんが持ち込んだウサギ肉を焼きながら、打ち合わせが始まった。

ちなみにウサギは、たくさん子供を産むことから、蛋白質の補給源として飼育が推奨されている。

最近では、生まれたウサギを納めるようにという「ウサギ税」も導入された。

こういうことを考えると、本気でナラールが末期的な気がしてくる。

なら、赤ら顔の酔っ払いが反政府運動の代表であってもなんら問

題は無い……気もする。

「メンシエビキ（少数派）ねえ？」

「我々の同志は、未だに少ないからネ。戒めの意味もこめて、そう名乗っている。」

同志アレックス・ブラウン。我々は、この世界に理想郷を作ろうとしているんだ」

メンシエビキ代表、マートフ氏は香ばしいウサギ串を手に、熱く語り始めた。

ユーリ・オールドマン体制の腐敗、新しい思想に基づく政権の必要性を。

「同志アレックス。今日まであらゆる社会の歴史は階級闘争の歴史なのだよ。」

支配するものとされるものがある、だから不幸が起きる」

農民を支配する軍人、混血を蔑む純血者、ユーリ・オールドマンが一方的に定めた百の階級。

「搾取するものと搾取されるものが居る。」

これこそが世界の不幸だと、我々は理解した。

だから、すべての者が平等に働き、富と成果を分かち合う、そんな理想郷を作るんだ。

身分も、貧富も、国境もない世界政府、被搾取階級による楽園、ソヴィエトを、我々はこの手で作り上げなければならない。

我々、共産主義者は、そのために腐敗したユーリ・オールドマン政権を打倒する！」

「共産主義って、よくわからないけど、随分と好戦的な団体なんだ」
「共産主義者は、彼らの目的が、既存の全社会組織を暴力的に転

覆することによってのみ達成できることを、公然と宣言する”――
カール・マルクス著作、共産党宣言だ。

俺の故国じゃ、平和主義の代表みたいな仮面被っていたが、実際は、全世界規模での政府打倒を目指す超武闘派団体だからな。

各国で警戒されるのも当然の話だ」

「真理に目覚めたものが言われ無き弾圧を受ける。

だが、我々は屈しない！ ソヴィエトがこの大陸を覆う日まで！」

「カール・マルクスって名前は聞いた事がない。どこの国の人なんだ？」

アレックスの問いに、逃がし屋はしかめつらして黙り込んだ。

「遠い昔、遠い国にいた爺さんさ。

裕福な弁護士の子のくせして、浪費が祟って借金大王になった。友人に職をたかるは、友人の奥さんを寝取るは、最後には未完成の論文まるごと友人に押し付けてくたばるは、どこまでも身勝手に生きた。

いたんだよ、そんなロマンチストが」

「だが、彼の志が、世界を救うのだ。

キミも読みたまえ、同志アカーシがナラール語に訳した『資本論』と『共産主義宣言』だ！」

マートフに押し付けられた書物は、あまりに分厚くて、あまりに巻数が多く、とても一朝一夕では読み終われそうに無かった。

「あんた、こんなにたくさん本をよく訳せた……」

「ン。金の為に、な。

今じゃ、少しだけ、後悔しているよ。

俺はひよつとしたら、核兵器よりタチの悪い代物を、持ちこんじまったのかもしれない」

初めて会った時、木の枝を齧っていたように。

訳者 あかえだきいちろう 赤枝基一郎アレックスには読めない文字で、そう表題に印

字された無数の本を見ながら、逃がし屋はがりがりとうサギの串を噛んだ。

4

そうして、テムスンの収容所からナーシャを奪還する日がやってきた。

逃がし屋、アカエダがメンシェビキと打ち合わせた結果、朝日が昇る前、囚人達が鉾山に追い立てられる前に決行することが決まった。

「ナーシャ一人を助けるんだったら、昼でも構わないんだがな。

マートフたちは、とっ捕まってる政治犯達を、仲間に引き入れたらしい。

革命つてのは、収容所を襲うのがお決まりのセオリーでね。

こいつで名前を売って、民衆の支持を取り付けたいって見込みもあるんだろ」

そう言っつて、逃がし屋はまたどこからか折ってきた木の枝を噛みはじめた。

マートフが連れてきたメンシェビキの私兵はわずかに20名。

テムスンの収容所に詰めている警備兵は、看守を合わせておよそ50名。

（たとえば奇襲を掛けるにしても、二倍以上の戦力差。勝てるのか？）

アレックスの胸の中を、不安がこみ上げてくる。

特に、メンシェビキの装備を見つめれば。

「なあ、あんたら、それはいったい何の冗談なんだ？」

彼らが着た、そろいの皮のつなぎとコートは問題ない。

だが、ヘルメットを被り、グローブをつけた手には「労働者解放」とか「革命成就」と書かれたプラカードと酒瓶。

いったい何をしにいくのか、わかったものではない。

「遠足やデモに行くわけじゃないんだぞ？ 何考えてるんだ、あんた達は！」

アレックスの叫びに、マートフは白い歯を見せて笑い、ごつい親指をびしりと立てた。

「問題ないネ！」

そうして、プラカードの頭部ををちよいちよいとねじると、あっさりと外れて、巨大な棍棒の如き角材が真の姿を現した。

「どうだい？ これはゲバルト棒といってネ。

プラカードに見せかけて、実は凶器になるというマジックなアイテムなのさ。」

「……」

絶句するアレックスに、今度はアカエダが酒瓶をおしつける。

「この酒瓶、中に油が入ってるから、注意しろよ。

濃硫酸と塩素酸カリウムを使った触発式だ。

普通はガソリンだけで作るんだが、おまけに亜鉛とリン、ナフサにパーム油なんかを混ぜてある。

一応調整はしてあるが、下手な爆弾とは比べ物にならないほど燃え広がる。

割れた瞬間、大惨事になるから注意しな」

「あ、あんたら……」

この時、初めてアレックスは、アカエダやマートフを心底恐ろしいと感じた。

「なんで、こんな面倒な真似を……」

「そりゃあ、子供達に、こう言い聞かせるためさ。

”我々はあくまでも非暴力で革命を目指した。

それにも関わらず、官憲は暴力で我々の運動を弾圧したのだ”……
…ってね」

アカエダの瞳は、ヘルメットと、色眼鏡で隠れて見えない。

「どこがだ？ 棍棒と爆弾を持つて。どう見たって立派な反政府活動じゃないか」

「あるいは、こう言い換えてもいいかもな。テロリ…」

アカエダの背中を、マートフが丸太のような腕が抱きしめた。

「アカーシ。我々はレジスタンスだよ。

キミの故国がどうだったか知らない。

だが、このナラールに議会は無く、政治を変えるには、武力しかないんだ」

「悪い。失言だ」

「気にする事はない。

キミは理想主義者で平和主義者だ。

”だが、この国も、世界も、それがまかり通るほどに甘くない”」

アカエダは、沈黙する。

その静寂を払うかのように、マートフが号令を掛け、収容所解放作戦は始まった。

「不当なる弾圧によって収監されたあー、すべてのあー、労働者、
諸君！」

マートフがハンドマイクを片手に、収容所の正門前でアジ演説を始めた。

朝駆けの大騒ぎに、警備兵達が石弓や槍を手にならわらと集まっ

てくる。

そこに、メンシェビキの同志が、火炎瓶を投げ込んだ。

天を焼く、火柱が立ち上る。

ナパーム。

アカエダが故郷の世界から持ち込んだ知識によって作られた、この世界におけるオーバーテクノロジー。

湾岸戦争でも使われた、焼夷爆薬だ。

火達磨になつて警備兵達が倒れるのを、アカエダは酷く覚めた目で見ていた。

異世界。

その響きに人は何を連想するだろう？

救世主とか、選ばれた戦士として歓迎されたり、世界を救つたり、ロマンスがあつたり。

「どこへ行つても、人間は変わらない。

そんなこと、わかつていたはずなのに、な」

争い、貧困、暴力、疫病、戦争。

人類の歴史は、血の色で染められている。

半世紀にわたる平和。

飢え死にすることも、夜を怖れる事もない日常。

それは、奇跡のように貴いものだ、知らなかった。

次々と火柱が立ち上る。

初めの奇襲で相手の戦闘力と、通信手段を奪わねば、皆殺しにあうのは、数に劣る革命主義者達だ。

マートフたちは、それをよく理解していた。

武器庫と、馬屋が灰燼に消え、角材を手に殴り込みを駆けてゆく。

「そろそろだぜ、アレックス。」

もうすぐ混乱が最高潮に達する。

その隙を突いて、ナーシャを助け出せ」

「あんたはどうするんだ」

不安そうに見上げるアレックスに、アカエダはにやりと笑って見せた。

「俺は、相手をしなきゃいけない敵がいる」

そう言った直後だった。

天を染める煙と火の中で、塔ほどもある、巨大な影が立ち上がったのは。

「偉大なるユーリ・オールドマン大元帥に逆らう不穏分子ども。

ただちに武器を捨て、降伏せよ！

繰り返す。暴徒どもよ。ただちに武器を捨て、降伏せよ。

さもなければ、共和国から借り受けた、この第五位契約神器。アーティファクト

『フレイムジャイアント炎巨人・“威風堂々”』の力を以って、諸君らを殲滅する！」

収容所に響き渡る大音声に、アレックスは覚えがあった。

カマキリこと、所長、ドミトリー・カウフマンだ。

「あ、あ、あ」

アレックスは、恐怖のあまり、立ちすくんでしまった。

契約神器、アーティファクトとは、一千年前、世界を滅ぼした《
力》

七つの鍵を巡る人間と巨人、妖精族の最終戦争で投入された最終兵器のことだ。

（もう終わりだ。勝てるわけが無い。最初から無理だったんだ、革

命なんて)

鉾山で発掘されたレアメタルは、共和国へ納められるが、その一部はあの巨人の整備にも使われていたのだろう。

全長10m^{メルカ}を超える巨大な黒鉄の身体。

ハリネズミのように、身体中から、何本も突き出た、巨大な砲台。世界を焼き尽くす、炎の巨人。

「阿呆か？」

砲台積み込みやいってもんじゃねーだろ。あれじゃあ、ろくに動けない。

それに、あの腰のとげ玉って、水中用の機雷じゃねーの？

水上艦に飛ばない対地ミサイル積み込んだ呆けた国を知ってるが、あの巨人はそれ以上にナンセンスだな」

怖れていない。

逃がし屋は、アカエダは、この窮地にあって怖れていない。

ボールのような黒ずんだ鉄槌子を振り上げ、大地に円と六芒星からなる魔方阵を描く。

「契約者、アカエダ・キイチロウの名において宣言する。

盟約に従い、来たれ、氷雪の巨人。

ともに神焉の舞を踊らんがために！」

白い光が、魔方阵から噴出する。

輝く結晶が鋼となり、骨格を、内燃機関を、演算機器を、操縦室を、装甲を。

わずか一呼吸にも満たぬ間に形作り、真っ白な巨人となって降臨した。

「これが俺の、アーティファクト第五位契約神器、フロストジャイアント雪巨人・“愛と平和”だ。
炎の巨人は俺が抑える。行け、アレックス！」

第4話 とらわれの令嬢

5

1000年の昔。

魔道技術を極めた世界は、戦争によって滅んだという。

辿り着いたものに、あらゆる願いを叶えることができる「世界樹」へと至る虹の橋。

その扉を開く鍵となる、七つの神器を巡り、人の世の国々が、妖精が、巨人が、小人が、魔が、互いにあい争った。

戦乱によって、あまたの国と大陸が炎に飲まれ、あるいは海へと沈んだ。

伝承は、この世の破滅を願う「黒衣の魔女」を、「神剣の勇者」と呼ばれる少年が討つ事で幕を閉じる。

どこにでもありそうな、創世の、あるいは、終焉の神話だ。

天使が喇叭^{ラッパ}を吹き鳴らしたり、黒い神様が帰ってきたり、海の底で眠るよくわからないものが目覚めたり……

あるいは、膨張する宇宙が収縮して大爆発を起こすとか、そんな、よくある話。

ただ、困った事はひとつ。

ミスガルス大陸には、痕跡が残っていた。

大陸を東西に真つ二つに分ける、奈落のごとき断崖と、天を貫く山脈の存在。

そして、千年前の遺跡から、彷徨い出る怪物と、戦争の”遺産”が確認された。

現在の技術では、再現不能な超兵器の数々。

”盟約者”と呼ばれる主と契約する事で起動する、一国をも滅ぼしうる”殺戮兵器”が存在するのだ。

これらの兵器は”アーティファクト”と呼ばれ、大陸の軍事バランスを左右する重大な懸念として、黒い影を落としていた。

（つまりは、核の平和ってやつ？）

第二次世界大戦において、アメリカ合衆国が生み出した”破滅の炎”

後を追うように、ソ連が、中国が、イギリスが、フランスが、次々と保有した。

いずれかの国が核を使えば、報復の連鎖によって、地球そのものが滅びかねない。

だから、世界は、これ以上核兵器を持つ国が増えないように、国際原子力機関（IAEA）によって、軍事転用を防止する動きに出た。

（大陸諸国は、ナラールという犯罪国家の、アーティファクト所有を認めない）

白い巨人が、腹部を開いて、アカエダを胎内に誘う。

たまごのような操縦室に満ちた、海を思わせる、青く暖かい液体が、ヘルメットを外した長髪を、掛けたままのサングラスを、鍛え上げた手足と肉体を包みこむ。

状態を知らせる、色とりどりの魔術文字が、水中を流れるように映し出されてゆく。

——” 状態異常なし（システム・オールグリーン）”

（行こう。ユミル、我が相棒）

アカエダの指先が、” 起動” を意味する文字に触れ、文字が明滅する。

瞬間、青い水は見えなくなって、視覚素子から転送された映像が360度に映し出された。

ハリネズミのような黒い巨人は、すでに数十もの砲口から牽制の砲撃を放っており、白い巨人はオートパイロットでこれを回避していた。

「なんなのだ。なんなのだ、貴様は！」

激昂しているせい、妙に高く裏返ったみ声が、音声素子によって拡大され、収容所を振るわせる。

「報告は受けているぞ！」

スホンのダム、アエリアの鉱山。貴様のせいで、我が国は、すでに二つのアーティファクトを失ったそうだな。

白い巨人よ。貴様は、アメリカの職員か？ 王国の狗か？ それとも南部国家の鼠か？ 応えよ！」

テムスン収容所所長、ドミトリー・カウフマンに、逃がし屋、アカエダ・キイチロウは笑って答えた。

「なんだ、知らないのか？」

どこの国にも縛られず、どこの軍にも所属せず、ただ、…革命の正義に従って武力を振るう存在を。

そう、俺こそは” 地球市民” だ」

「ただのテロリストかあ！」

「そうとも云う」

「そうとしか言わん！」

黒い巨人の砲撃を、アカエダは鉱山を背に白い巨人を無軌道に跳

躍させることで、照準から逃れ続けた。

赤い火の玉が、雪崩を思わせる量と大きさで、次々と吐き出されるが、当たらない。

かすりさえもせず、無情に鉾山の枯れた大地を叩くのみ。

（人間の身体は、そもそも鈍いものなんだ）

走り、飛び跳ね、踊る。

ただそれだけの行為に、重すぎる上体を支えるため、常に二本の足と腰に負荷をかけ続ける。

裸でさえそうなのだ。

たとえば、あのような、ハリネズミの如き砲台という、体重のウン倍ものチョッキを着れば、どうなるか。

（KDX計画と言ったか？ 軽駆逐艦にアホみたいな量のミサイル積んで、対潜魚雷を積み忘れた冗談みたいな船があったが）

実戦となれば、過重から身動きもとれずに潜水艇の餌食となるだろう某国のナンセンスな船を、アカエダは思い出す。

だが、あの黒い巨人の無意味さは、その更に上を行くだろう。

（アーティファクト”契約神器”は、大陸の軍事均衡を揺るがす、強大な力だ。しかし、それも、使い方次第）

人間に、人型であることに意味があるとするならば。

それは、「合理的な動き」で速度や跳躍力を高められること。

あるいは、複数の武器を使いこなすなどの「複雑な動き」を可能とすることにある。

ただの固定砲台としてしか扱えないならば、人型である意味はなく、むしろ構造上致命的な程に装甲が脆くなる。

（お前たちには、過ぎた力だった）

黒い巨人は、白い巨人の高機動を捉えられない。

旋回すらままならず、めくらめつぼうに炎の玉を吐き出すだけ。

蝶のように舞う、白い巨人の胸に小さな翼が生えて、左翼から五本の砲塔が飛び出した。

アカエダの目前、360度を映すモニターに映る5つの照準が、黒い巨人と一致する。

「破壊する！」

凍てつく白い五条の閃光が、黒い巨人へと向かって迸った。

アカエダに見送られ、収容所へと入ったアレックス・ブラウンは、歩きなれた廊下を飛ぶ様に疾駆する。

「おい、ダブツ」

槍と石弓を抱えて飛び出してきた警備兵の首に、すれ違いざまナイフをねじ込んだ。

「ごふっ」

間欠泉のように赤い血しぶきをあげて倒れる元同僚を、アレックスは酷薄に見下ろした。

彼は何かにつけ暴力を振るい、からんでくる嫌な男だった。

だというのに、何の感慨も起きないのは何故だろう？

「ああ、そうか」

色あせた赤い髪の下、鮮やかな血潮に濡れた両の掌を、血走った

右目で見つめて理解した。

「あんたの生命は、僕の人生に無価値だった」

ただ、それだけのことだ。

単純な、ひどく簡潔な、理由。

マートフたち、メンシェビキが囚われた囚人達を解放する中、アレックスは無言で警備兵と看守を処理した。
ダブルと蔑み、反逆されるなど欠片も疑わなかったのだろう、愚かもめたちは『敵』にすらなりえなかった。

最初に殺した同僚から奪った石弓の引き金を引く。
ただ、それだけで、数名のともし火が、……消えた。

「同志アレックス。早まってはいけないネ」

マートフがごつい手で、わしゃわしゃとアレックスの赤髪を撫でた。

「キミは、まるで死に急いでいるように見えるヨ」

異な事を言うと、アレックスは思う。

生きているという実感が無いのに、死に急げるはずも無い。

「メンシェビキが救うのは、ここに囚われた労働者だ。
けれど、囚われの姫プリンセスを救うのは……」

パチンと、ひげもじやの顔でウィンクする。

似合わないと思う。けれど、凍っていた感情が、少しだけ緩んだ。

「ええ、助けに行きます」

戦闘と囚人の避難誘導をひとまずメンシェビキに預け、アレックスはナーシャ・キス力が捕らわれているだろう区画へと進んだ。鼻腔を突く香水と体臭の入り混じったにおい。

彼女を、ここから解放する。

その為に、逃がし屋を探し出した。

アカエダと闘った。全財産をはたいた。マートフと出会った。

（ううん。そうじゃない、きっと僕は）

今日、この日のためだけに生きていた。

「っ!？」

誰もが迎撃に出払っただろうと思っていた仕官室。

その廊下に、熊のような大男が石弓を構えて立っていた。

矢は、眼帯をつけたアレックスの左目の下、頬を切り裂いて飛び、一筋の血が流れた。

「何をするんです。隊長？」

「反逆者どもの手際が良すぎるわ。内通者がいるはずだ」

「それが、僕だと？」

テムスン収容所警備隊長、ピョートル・コルチャークは、ガハハと腹に響く声で笑った。

「貴様がそうであろうとなかろうと関係ない。

穢れたダブルは、処分する」

「そうか。僕もずっと望んでいた」

「何をだ？ 言ってみろ」

「あんたを殺す」

アレックスとピョートルは、互いに部屋のドアを蹴りあけ、振り向きざま、廊下越しに矢を放ちあった。

「愚かだな。ダブル。何が貴様を駆り立てた？

私怨か？ 憎悪か？」

それとも、と、巨軀に似合わぬ猫なで声で、ピョートルは付け加えた。

「好いた女でも、この収容所に居たか？」

アレックスの、指が、腕が、力み、矢が…外れた。

「ガッハツハ、凶星かあ！？」

誰が穢れた二重雑種の貴様を愛する？

そのような女などいない、この栄光あるナラールには！

まったく最高の道化だよ、貴様は」

「……………っ」

部屋の椅子や机を盾に用い、石弓を撃ち合いながら、アレックスは胸の痛みに耐える。

知っていた。そんなことは知っていたのだ。

（僕は、思い出だけで良かった）

高級将校の娘と虐げられるダブルでは、最初からつりあはずも無い。

ナーシャはいずれあの日々を忘れ、誰かと結ばれるだろう。……それでもよかった。

彼女が与えてくれた時間と、胸の中に芽生えた淡いオモイは、アレックスが覚えているから。

（その記憶がある限り、兵士として闘えた。

国のためでも、独裁者、ユーリ・オールドマンのためでもない、ただ、彼女一人のために！」

そう、思えば、アレックスには何一つなかった。

何一つ与えられなかった。

ただ踏みにじられ、潰されるただけに存在する、そのためだけにしか許されないダブルという身分。

何のために生きているのかわからなかった。

生きたいとも思わなかった。

空っぽだった。

ただ、心の中に鍵をかけた、幼い思慕だけが、半生で唯一彼が得た、生きた感情だった。

「ピョートル・コルチャーク。

あんたは、どうして社会に格差や階級差があると思う？」

「何をくだらぬことを？ それは偉大なる元帥様がお決めになることだ。

オレたちのような名家の血筋と、貴様のごとき豚の前足のような屑は生まれからして違うんだ！」

「そう、ユーリ・オールドマンが決めること。

彼は、この国の生産手段と財産のほとんどを握り、独裁を強いている」

「貴様、何が言いたい！？」

「生産手段と財産の占有を認めるから、社会に平等は生まれない。

だから、平等な社会を作り出すためには、一切の財産の、土地の、道具の、私有を認めず、共有化すればいい」

「戯言を！

そのようなこと、元帥はもとより、法律家の先生達も認めるものか。

机上の空論にすらならんわっ」

「だったら、殺してしまえばいい。

”下手に頭のいいインテリは、革命には邪魔だ”」

「ダブル、貴様」

強面のピョートルの顔がわずかに硬直した。

おかしいと、こいつの論理は、言葉は破綻していると。

何かが狂っていると、警鐘を鳴らす。

「ちい」

どれほど撃ち合ったか、ピョートルの矢は、遂に尽きた。

アレックスも同じなのだろう。

撃ち合いを始める前に確認した矢は、とうに使い尽くしたはずだ。戯言に乗せられて、矢を使い果たした自分に、ピョートルは腹を立てた。

「出てこい、アレックス！」

大振りのナイフを手に、ピョートルはそろりと廊下を伺う。

「!??」

いつから潜んでいたのだろうか？

どうして気配が消せたのだろうか？

アレックスが、汚れ役として、内部粛清者の役割を押し付けられていた事を、ピョートルは愚かにも失念していた。

力任せに振り下ろしたピョートルのナイフは、急襲するアレックスのナイフと噛み合って火花をあげて。

次の瞬間、ピョートルの視界は赤黒く染まった。

「ぐおおおおおおああおおおつ」

声にならぬほどの絶叫、否、野生の咆哮が、断末魔の如く響いた。ピョートルの両目を、二本の指で潰したアレックスは、耳元で柔らかに囁いた。

「搾取階級などいない。

誰もが農村で働き、誰もが労働し、誰もが生産手段を分け合う、そんな社会を作ればいい。

国や国境などという概念も要らない。

世界中のすべての権力をソビエト（人民議会）に集め、平等な理想社会を作ろう。

そして、ボリシエビキ（多数派）を率いて君臨すれば、僕が王だ」

「グオオオオオオオオ」

そして、アレックスは誓いを果たす。それは、かつての上官へのせめてもの情けだったのかもしれない。

燃え盛る火柱が盾のように広がり、黒い巨人を守るのを、アカエダは視認した。

「なるほど、これが異世界」

「もはや、いい。」

反逆者も、囚人も、ナラールにはいらぬ。焼き尽くしてやる！」

「火病ってんじゃねーぞ。このタコ野郎！」

黒い巨人が、数十もの砲台を収容所に向けるのを見て、白い巨人は守るように立ちふさがった。

「もろともに滅びされ！」

最終話 英雄ならざる者たちは、されど変革を目指す

最終話 英雄ならざる者たちは、されど変革を目指す

6

アレックスが警備隊長ピョートルと、アカエダが収容所所長ドミトリーと交戦していた頃、革命組織メンシエビキもまた、警備兵や看守達と死闘を繰り広げていた。

ミスガルズ大陸の戦場で、主力となる武器は石弓だ。

取り回しが容易な上、射程が長く、殺傷力も申し分ない。

とはいえ、反体制派であるメンシエビキは、ユーリ・オールドマン政権以上に困窮していたから、あまり多くの石弓と矢を用意する事ができなかった。

その為、制圧戦においても、まずは飛び交う石弓を床に伏せ、あるいは柱を盾にやり過ぎ、射線の弱まった頃に、集団で突撃して角材を叩きつける戦術を取る事になった。

だが、幾たびもの死線を越えてきたメンシエビキの同志達に比べ、収容所の兵士達はあまりにも弱かった。彼らは、ろくに連携も取れぬまま、矢を無慮に撃ち尽した拳銃、悲鳴を上げて走り出すのだ。メンシエビキは、そうやって逃げる敵の背中から、角材を叩き付けるだけでいい。

肉を打つ音、骨のきしむ音、悲鳴が木霊して、腕や脚が、肩や首が、ひしゃげてもげて、木張りの床を赤く赤く染めてゆく。

マートフもまた、無謀にも槍を捨てて逃げた愚かな兵士を、後頭部から殴りつけた。

「お、おのれえ。忘れぬぞ。忘れぬぞ、この怨みい

我らが”恨”の力が、必ずやお前たちを滅ぼつ、ぐえつ」

ああ、とマートフは嗤う。

この情念、この滑稽さこそ、我が国を蝕む癌に他ならないと。憎しみは大きな力を生む。

その力を昇華すれば、あるいは新らしい何かを創造することも、大切な何かを守るためにも結びつけることができるだろう。

だが、こいつらは違う。

未来も、現在もかなぐり捨てて、過去に執着し、そればかりか、憎しみに都合の良い過去を捏造する。

何が”恨”の力だ。どこどこまでも愚かしい。

「畜生根性も、ほどほどにすることだネ。

キミたちの憎しみには意味が無い。

なぜなら、カビの生えた価値観に固執するばかりか、虚偽を生み出して、見当違いの憎しみを育てるだけに終始するからだ。

憎しみで憎しみを燃やすだけの、キミたちが掴む未来は無いヨ。

我々は”恨”ではなく、科学と合理に基づいた新しい国を作る。

いずれ、王国や共和国をものぐ、強大な国を、ネ。

せめて、永遠にこない「10年後（キミたちの時代）」を夢見て死ぬといい」

マートフが角材を振り上げ、断末魔の叫びがあがった。

生命を砕く、レクイエムが流れる。

兵士のともし火が消える頃、ヘルメットと皮のつなぎで武装した、メンシエビキの同志がやってきた。

「同志マートフ。

新たに第7、第8ブロックを解放。

これで収容所全域の9割を制圧しました！」

「上出来だネ。こちらの負傷者はどうだい？」

「はっ。軽症が5名、戦闘不能の傷を負った者は2名です。幸い、命に別状はありません。」

”火花”で治療すれば、すぐにでも復帰できるでしょうが……」

収容所の外に目を向けると、白い巨人が黒い巨人をひきつけ、砲撃をかわしているところだった。

「あれ”をなんとかしないと無理そうだネ”

「同志マートフ、申し上げます。」

アカーシが腕の立つ”盟約者”であることは認めます。

しかし、彼は同志ではなく、”逃がし屋”に過ぎません。

アーティファクトに対抗できるのは、アーティファクトだけ。

ならば！

「彼を処分し、雪巨人と召喚杖を共有化すべき、とでもいうのかい？」

血に濡れた右手で、濃い髭を搔きながら、マートフは目を細めた。

「怖れながら。」

我らの少くない財貨が、あの”逃がし屋”につき込まれていきます。

この収容所を解放すれば、我らの名も大陸に響くはず。

ユーリ・オールドマンを討つ為の力を、我ら自身の手に。

なにとぞ、ご決断を」

マートフは顎から手を離し、角材をがっしと握り締めた。

「却下するヨ。」

ひとつにアーティファクトがただの魔道装置でなく……、契約神

器と呼ばれる理由を考えてみたまえ。

アレらは意思を持っている。

アカーシを葬っても、あの白い巨人が我らを認めるとは限らない」

「やってみなければわかりません！」

「ふたつ、アカーシを殺せば、彼のネットワークを失うことになるヨ。」

彼が横流ししてくれる火炎瓶や情報を、どうやって入手するつもりだい？

たとえばあの巨人を奪ったとしても、整備や維持にかかる費用は、アカーシに支払った金の数倍になるだろう」

「しかし」

マートフは、ゆっくりと、角材を持ち上げた。

「みつつめ、裏切りを繰り返すのは、ナラールとナロールの悪癖だヨ。」

たとえば、ナラールとナロールの歴史全てを改ざんしても、他国の歴史の記述は残る。裏切りの真実は、消えない。

調べたものは、こう思うだろう。……ナラールとナロールは、全くもって信用ならない最低の国だ、とネ」

マートフは横殴りに、角材を元同志に叩き付けた。

「最後に、いつ裏切るかわからないヒトモドキを飼っておくほど、メンシエビキは甘くない。

そういうことサ」

飛び散る鮮血を見ながら、マートフは思う。

（アレックス。キミは、どちら側に立つのかな？）

「ひいつひいつ」

メンシェビキに追われ、一人の看守が警備士官室へと逃げ込んでいた。

（あの女だ。ナーシャ・キスカだ。

あいつを使えばきっと、見逃してもらえる）

警備隊長、ピョートル・コルチャークが使っていた部屋。

赤い絨毯の上、成金趣味の家具と拷問具が無秩序に並べられ、天井からは鎖が伸びていた。

一人の半裸の女が、手枷を嵌められ、鎖に吊るされている。

看守は、女の身体を盾にするように隠れると、自分を追うヘルメットの男に叫んだ。

「待て。話を聞いてくれ。

驚くなよ！

この女は、中央軍のキスカ参謀の娘だ。

こいつを差し出すから、おれの命だけは見逃して……」

看守の命乞いに、男は足を止めた。

ヘルメットを外し、くすんだ赤毛が広がる。

「お、お前は——！？」

「死ね。外道」

顔見知りのナイフが、非情に看守の腹を切り裂く。

赤黒い血が絨毯に広がり、今際の絶叫に、気絶していたナーシャは目覚めた。

「貴方……？」

「遅くなつてすまない。助けに来たよ」

「アレックス・ブラウン！？」

テムスン収容所を背に、立ちはだかつた白い巨人に、黒い巨人が針山の如き巨軀を向けた。

黒い巨人が装着した砲門は、大小あわせておよそ30を越え、直撃を受ければ白い巨人とたたきでは済まない。

全砲門の一斉射撃を、身を盾に阻んだとしても、稼げる猶予はわずか数秒にも満たないだろう。

「わかつているのか？ 自分のやろうとしていることが！
収容所には、まだ兵達も残っている。こんな虐殺に何の意味がある！？」

「貴様達だ。貴様達が来たから、そこにいる者達は死ぬのだ。」

囚人も、兵達も、貴様が殺すのだ。この、偽善者め」

「話を聞け！」

アカエダの叫びは、我を失ったドミトリー所長には届かない。
黒い巨人の砲門が、白い巨人に、収容所に向けられる。

「革命だと？ 寝言を言うな。」

豚の足どもは地べたを這いずるが定め。

ユーリ・オールドマン元帥の栄光のもと、天罰を下す。

死ね。死んで灰となれ、この偽善者め！」

『術式——”威風堂々”——起動！』

（偽善か。そう、確かに、偽善だ）

雪巨人の胎内で、アカエダは瞳を閉じた。

自分の行為も、マートフ達の革命も、所詮偽善に過ぎない——。

最も科学的で合理的とされたマルクス主義は、その生まれから致命的な欠点を抱えていた。

共産主義、その最大にして最悪の欠陥は、人の悪意を考えなかったこと。

資本家のみを悪として、平等を夢見て戦った。
平和な社会、誰もが富と知識を分かち合う、理想郷があると信じて。

けれど、辿りついたのは恐怖国家。

人類史上初めて共産革命を目指した男は、宗教を根絶やしにするため、徹底的な弾圧を加えた。

彼の後を継いだ男は、東欧の国々を次々と侵略し、国内でも徹底的な粛清によって数え切れない人命を奪った。

農民達を率いて祖国奪還の闘いを挑んだ男は、文化大革命によって国の文化そのものを破壊し、8000万人もの同胞の命を奪ったあげく、他国にその罪を押し付けた。

何も無い、この世の地獄を作った将軍。知識層を殺戮した革命者。

まるで夢のような理想を掲げて支配階級を打倒したあげく、支配階級に成り代わり、過激な殺戮と粛清を繰り返す愚かな歴史。

どれほど高邁な理想も、現実の悪意の前には汚され、貶められるのだ。

かつて世界を相手に戦った国があった。

白色人種が有色人種をモノとして使役する世界を変えようと抗い、結果的に戦争へと誘われた。

『一民族一国家』——最初に掲げたユメも叶える事叶わず、戦線を拡大して遂には敗北する。

そうして、その国は戦勝国によって、ある憲法を押し付けられた。二度と戦を起こさぬように、平和を謳う憲法を。

それは、確かに押し付けられたもの。

けれど、同時に、その国の民が望んだ理想でもあった。

だが、現実是非情だった。

隣国は、ほどなくして国際法を無視した李承晩ラインを引き、かの国は4000人の漁師を拉致され、44名を殺害されることになる。

掲げた理想は手足を縛り、己の国すら守れず、隣国の悪意によって苦しめられる。

そして、国内もまた。

西で起こった大震災。

当時の首相は、隣国に過剰な配慮をした挙句、平和憲法を理由に特殊部隊の派遣を止めた。

絶対的な人手不足と装備の不足。

炎の中、瓦礫の中で潰れてゆく人々。

地獄絵図。

救えたはずの命、失われた未来、そして思い出。

（理想は腐敗の温床となり、利権家は理想の裏側で、まるで吸血鬼のように生血をすすする）

あるいは。

理想さえなければ、東欧で虐殺などなかったかもしれない。

東トルギスタンの虐殺も、チベットの民族浄化も。

かつて、平和と革命を夢見て、学生運動に参加した者もまた、後に仲間割れで妊婦すら胎児を取り出して惨殺する凄惨な内ゲバをやらかし、ある者は人質を取って山荘に立てこもり、ある者は航空機をハイジャックするただのテロリストに堕ちた。

（そう、これでは、偽善ですらない。ただの、邪悪だ）

黒い巨人の砲口が赤くゆらめく。

（言葉は届かず、理解はなく……）

黒い巨人から、圧倒的な魔の気配が吹き付けてくる。

迫り来る炎をアカエダは幻視する。

白い巨人は指先から溶けてゆく。

防ぐ事など叶わず。

守ろうとしたものと、もろともに灰になるのみ。

「」

アカエダは、瞳を開いた。

目の前をゆらゆらと、一枚の写真が漂っている。

硝子で閉じた枠の中には、七人の少年少女が写っていた。

「貴様にはわかるまい。俺を支える力がなんなのか」

背には、理不尽な暴政によって囚われた人々。

前には、命を弄び、魂を慰み、肉を侵して笑うものども。

「許せるものか」

どこに行っても、人は変わらない。

支配し、奪い、他人を踏みつけにして快楽を貪る。

弱者のため？ 正義のため？

枕詞こそ違え、善意を土足で穢し、ダブルスタンダードを超然と
行う。

本当に泣いている弱者を。

本当に苦しむごく普通の人々を置き去りに。

その究極が、目の前の光景だ。

「間違った」

真に左翼と呼ばれるものが、平和と平等を願うものがあるとする
ば。

討つべき者は、他にいた。

良心につけこみ、利権を貪るもの。

主体社会をつくろうとするもの。

かつて左翼と呼ばれたものたちが祭り上げたものたちこそ、真に
討つべき邪悪に他ならない。

彼らが何をもたらした？

彼らが討ち滅ぼした搾取階級以上の搾取と粛清。

彼らに都合の良い歴史の改ざん。

彼らの望む政治と社会、歪んだシステム。

その果ての崩壊だ。

理想は間違っていなかったかもしれない。

貧困を打破し、都市と農村の共栄を目指し、皆が幸いとなる道を模索する。

だが、目標が間違っていなくとも、手段において究極的に間違っていた。

ユートピアは、掴まれることなく、消えるだけ。

「だが、たとえそうだとしても」

共産主義というものが歴史に咲いた仇花だったとしても。

血塗られた旗と、屍の山しか築かぬ、悪夢の如き現実しかもたらさなかったとしても。

夢見た理想だけは、美しいものだったと信じたい。

「だから、俺達は、その先に行く」

——第二位契約神器・戦略衛星フレスベルグにデータリンク。

「間違った歴史を知る後継者として。

過ちを知り、過ちを正し、未来へと繋ぐ！」

——”魔導電腦ユミル” 一次演算終了。

アカエダは、今にも放たれようとする砲火を前に、怯えず躊躇わず、透明な水中に浮かぶ文字をなぞり、解放し、魔術を紡ぐ。

——ラプラス式位相配列レーダー、探査ON
フェイズドアレイ

——誘導波動フレイソード照射

——背部VLS、胸部翼砲塔、肩部機関砲、全面展開、

——迎撃白華弾 氷結粒子砲、電弾砲、全弾解放

「『術式——”愛と平和”——起動！』」

神話において、ムスペルの子、炎の巨人は世界を焼く炎を放つという。

黒い巨人が、伝説を彷彿させる、莫大な量の火の玉を。火龍を模した業焰を。三日月状の炎の刃を、全身から突き出した砲台から射出した。

神話において、邪神が舵取るナグルファルに乗る、雪の巨人は、電と霧で世界を霜に包むという。

白い巨人の背から氷のロケットが飛び、胸部から凍て付く白い閃光が迸り、肩部から現れた機関砲が電の弾丸を嵐の如く吐き出した。

氷が、炎を駆逐する。

自ら飛翔し敵を切り裂く、豊穡神フレイの剣が如く。

すべての赤き力を、白き力が追尾し、打ち払う。

「あ、有り得ん！？」

ドミトリー・カウフマンは絶叫した。

確信していた勝利、約束されていた凱歌が、虚無の縁へと消えてゆく。

こんなものは知らない。
こんなことは知らない。

黒い巨人が白い巨人の砲撃を防いだように、障壁を張るのではなく、あるいは高度の魔術で軌道を捻じ曲げるのでもない。

放たれた魔砲すべてを、同じ魔砲でもって叩き落とすなどという思考は、ミスガルズ大陸には存在しない。

「注文通り。どこの国でも技術者は国の宝だな」

アカエダは、サングラスを外し、呻いた。

物に命を吹き込む職人の意地のみが可能にした芸術品。

対米黒字の穴埋めに押し付けられた欠陥船を、各界の技術者が全力を尽くして改造し、本家本元の船に勝るとも劣らぬ水準にまで高めてみせた。

この異世界でもそうだ。

互いに必要であつたとはいえ、不完全なアカエダの知識から、携わった職人と技師たちは、千年前の遺物を、実験機とは思えないほど完成度の高い傑作機へと改造してくれた。

アカエダが参考にしたアイデアは、簡易量産型を除けば、世界中で、米国と日本だけがもつ、ただ守るだけの兵器だ。

しかし、驚異的な基礎技術と電子技術に裏付けられたそれは、弾道ミサイルをも防ぎうる。

故に、かのシステムは、名付けられた。

デウス
メドゥーサ
天神の雷を受け止め、墮神の瘴気をも断つた神話にちなみ。

『不破の盾』——と。

それは、衛星と連携し、艦隊と航空部隊の目となり脳となり、単艦で三艦を相手取るとされる船の名前。

異世界で作りに出された白い巨人の不破の盾を前に、黒い巨人の砲撃はすべて撃ち落され、そればかりか、ハリネズミのようについた砲台が、ひずみ、ゆがみ、くだけ、自壊し始めた。

「こんなことは、有り得ない！」

ドミトリー・カウフマンは哀哭した。

このアーティファクトは、ナラールが誇る最強の力だ。これほどの火力。これほどの数。

負ける理由は、万がいちにもなかった。

狂ったように、ドミトリーは砲撃を続け、衝撃と整備不良から、炎の巨人は自壊の速度を速めてゆく。

「たかが、革命組織に、たかが豚の足どもに！

この栄光ある良血種たる我らが負けるなど！」

そうして、わずかに残った理性が、彼に思い出させた。

貪欲にあらゆる資源を飲み込み、使い潰す共和国とは真逆。

徹底的な小型化と高機能化によって、エネルギーの効率化、高出力化を進め、循環を求めて自然との共生を目指す国。

臆病者と謗られ、しかし、経済力と技術力をもつ、忌まわしき国家を。

「有り得ぬ！」

あの国は、ナラールとナロールにとって奴隷に等しい。
負けるわけが無い。

正しい事はいつだって正しいのだから。

奴隷が主人に勝つなんて有り得ないのだ。

ドミトリーにとって、不幸にも、それは絶対的な真実であり、前提条件から間違っているなど、考えもつかなかった。

「我らナラールは一万年の歴史を持つ、大陸の盟主！」

残弾も、魔力も枯渇して、棒立ちになる黒い巨人。

大地を蹴り、重心を移動させ、間合いを詰める白い巨人。

「我らは不敗、我らは常勝、大陸全てに愛される……っ」

炎の巨人の意思が、自動防衛術式を働かせ、炎のカーテンで、雪巨人の進路を阻んだ。

だが、エネルギーの残量は少なく、身体ごと突進してくる敵を止められない。

「奥義。落下流水——」

白い巨人が、黒い巨人に向かって踏み込む。

人体に、人型に意味があるとするならば。

それは合理的動作によって、速度と、破壊力を高められる事に他ならず——。

雪巨人の正拳突きが、炎巨人の心臓部を貫き、内燃機関を凍結させた。

千年前の遺産は、まるで刹那に千年の重みを過ごしたかのように、灰となって崩れ去った。

泣き喚く、盟約者を残して。

それが、カマキリと怖れられ、暴力で収容所を支配した所長の末路だった。

「いない、か」

アカエダは雪巨人の操縦席で、メンシェビキが助け出した囚人達の顔を、ひとりひとり拡大して確認し、深いため息をついた。
上着のポケットから、小さな額縁に入った写真を取り出す。

「生きて、いてくれよ」

二年前、暴走した車が、路地に飛び込んできた。
おそらくは、凄惨な事故になっただろう、事件。
そして、アカエダにとって、アカエダの友にとって、事故以上の事故となった、災厄。

「皆、必ず俺が、見つけるから」

ナーシャ・キスカはシーツをまとい、アレックス・ブラウンにお
ぶわれて、収容所を出た。

「馬鹿ね。こんなことをして。私にとって、あなたはただの友達だ
ったのに」

「うん。知っていた」

アレックスは、歩く。

ぬくもりを背負って。

ずっと届かなかった、ずっと焦がれていたオモイを背負って。

「私はもう、キスカ家の娘じゃない。私を助けても、何も……」

「僕が助けたかったのは、守ると約束したのは、君だから」

「馬鹿」

ふと、ナーシャの声が小さくなった。

「右に跳んで」

「え？」

訓練されていたからだろう。

ナーシャのアドバイスに、咄嗟に反応したのが、アレックスの命
を救った。

囚人に紛れていた兵士のナイフが、先ほどまで二人の居た空間を
斬っていた。

「くそっ」

アレックスはナーシャを背負い、ナイフに手を伸ばせない。
けれど。

「――」

アレックスのナイフが、腰のベルトから抜かれ、投擲される。他でもない、ナーシャ・キスカの手によって。

ナイフは、非力ながらも兵士の太ももに突き刺さり、足をとめた。

「このダブルめ！ メスぶっ」

兵士は、それ以上罵ることができなかった。

囚人達が、蜜に群がるアリの如く押し寄せて。

何か、潰れる音がしたから。

「これから、どうするの？」

ナーシャが、アレックスに問いかける。

以前なら、考えさえしなかったことだ。

でも、今は違う。

「この国を変えようと思う。

それが正しいのかわからない。

でも、もう、他に道はないから」

「そう……」

背中から、ナーシャはアレックスに頬を寄せ、言った。

「私も、そうしようかな。やられっぱなしは性にあわないの」

アレックスは笑った。

それでこそ、ナーシャ・キスカだ、と。

陽は、いつの間にか昇っていた。

くすんだ赤い髪と、すこし傷んだ金の髪が、日差しを浴びて、きらきらと輝いた。

テムスン収容所から、メンシェビキと囚人達は、マートフの第六位契約神器、陸上輸送艇『火花』で逃げ出した。

この後、彼らは地下に潜り、ユーリ・オールドマン政権打倒の戦いを続けるのだろう。

アカエダもまた、がらんとした収容所を後にして、隠れ家に戻ると、しばらく枝を噛んでいた。

昼を過ぎた頃、通信用の魔術水晶が振動し、アカエダはボールサイズのそれを手に取った。

灰の混じった栗色の髪と髭の老紳士が、茶の入ったカップを手元にこやかに微笑んでいる。

「爺さん……」

アカエダは、がつくりと膝をつく。

「やめろよな。俺のような作業員と話してるのバレたら、終わりだろう？」

「なに、パラディース教団の鼠に探られて痛い腹などない。

それに、二個師団、とはいかずとも、二個大隊に匹敵するエージェントとの交渉を、他の者には任せられんよ」

アーティファクトを持っていれば、誰だってそれくらいは出来るだろうとアカエダは思う。

世界を動かす諜報員になんて、アカエダはとても届かない。

「依頼は果たした。ナラール、三つ目のアーティファクトは、確かに破壊したよ」

「連絡は入っている。

相変わらず、見事な腕だ。

報酬は、いつものところに振り込んでおく。

今度また遊びに来なさい。

可愛い子が、我が家に遊びにきていてね。

少々人見知りするのが玉に瑕だが、きっと君も気に入ると思う」

アカエダは眉をひそめた。

老紳士は、彼が知る限り、共和国でもっとも信用の置ける人物の一人だ。

とはいえ、共和国で相当に高い地位にいることも間違いない。それは相応の闇を飲んできた事に他ならない。

パラデイス教団が運営する、処女の首に番号をつけた休息施設を思い出し、アカエダは吐き気を催した。

割り切るべきだと考えても、故国の倫理が、彼自身が、それを肯定できない。

「爺さん、俺は」

「そういう意味じゃない。大切な……朋友の養女だ。

遊び相手を欲しがっていて、君のような”客人”と話す事は、貴重だと思ったからだよ。

いいお茶といい菓子を用意して待っている。

その時には、君のアーティファクトも見せてほしいものだ」

通信は、終わる。

老人が何のために、ナラールのアーティファクト破壊を依頼したのか、アカエダにもわからない。

ほとんど奴隷国家の扱いとはいえ、ナラールは共和国の同盟国だ。なぜ共和国に属する兵器を破壊させる？

「まさか、国を割るつもりか？」

彼は複数の軍閥を束ねる領袖であるが、共和国では非主流派だ。

「……」

アカエダは、思考を止めた。

まだ材料がそろわない。

パズルのピースが足りていない。

今為すべきことはただ一つ、情報と金を集めること。

そして、いつかは、王国や共和国を出し抜いて、七つの鍵をこの手に掴む。

「必ず、元の世界に、皆で帰る。それまで、俺は”逃がし屋”だ」

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4405n/>

七つの鍵の物語 - 【英雄】 -

2010年10月9日04時11分発行